

寺田寅彦の新しさと創造の世界

佐竹省三

日本大学大学院総合社会情報研究科

TERADA Torahiko's New and Creative World

SATAKE Shozoh

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The essays written by TERADA Torahiko (1878—1935), a well-known physicist of Japan, cover not only the world of science, but arts, music, haiku and so forth. The world of his essays is a wonderful and miraculous world, as he searched for the truth and the beauty suggested by his professor and Japan's leading writer in modern times, NATSUME Souseki. He had many fresh proposals. They are ways of creation and ways for human beings to realize their wishes and dreams in this world. This is the reason why his essays must be researched again in the 21st century.

、はじめに

寅彦の随筆に、「自然の美の奥行きは、…。長く見ていればいるほどいくらかでも新しい美しさを発見できるはずのものである。」、<傍線・佐竹、以下同様>という一節がある。この「新しい」の語源・「惜」は「そのままにしておくのは惜しいほどりっぱである。」、の意だという。その昔、人々がすばらしいと感じたことから「惜しい」という気持ちが湧き、この言葉が生まれた、と辞書は記している。

現代語の「新しい」の中には、この「惜」しい、という心情的な価値があり、今までとは異なる、改められた状態だ、というのである。寅彦の訴える「新しい」にも上記の意が込められている。

ときに、『藤村詩集』の序にも「遂に新しき詩歌の時は来たりぬ。」、という一文がある。この「新しさ」とは、個人感情の浪漫的な開放であり、封建的風習への反抗で、切実な自己主張の発露だ、と伝えられている。当時としても、やはり改められた新しさ、惜しい意が込められている。

他方、寅彦の作品にも「新しい」世界がいたるところに鑲められてある。科学や文学、音楽や絵画、天文気象等、10項目以上にわたるジャンルの中には、美しい声やすばらしい考え、奇妙な光や不思議な現象など、実に色々な様相で紹介されている。

この「新しさ」とは、藤村の思想へも通じ、先生・

「漱石」から教えられた真なるものと美なるものであることは、今までに何度か述べてきた。

この意義と価値とは、洋の東西を問わず、時代を超えた人類の願いであり、我々にとっても理想の世界であることに変わりはない。

そこで、寅彦の作品を再度検証し、「新しさ」への世界に分け入り、その姿を明示してみたい。それは、この世界には、驚きや快さの中にも慰めや安らぎがあり、癒しとなるからである。癒しは、明日への活力となり、新たな生きがいにも通ずる、とされている。

人類の歴史を紐解いたとき、この「新しさ」は文化的進歩と発展の源となり、その役割を演じ、力となって来た。

しかし、この「新しさ」とは如何ようにして生まれるのか。その心象風景はいろいろに取りざたされているが、謎の部分が多いように思える。ゆえにこの問題に取り組むことは、価値があるように思えてならない。以下、寅彦の作品を中心に、この問題へ迫ることにする。

、新しさと創造

1、「新しさ」について

孔子の教えに、「温故而知新、可以為師矣」、という名言がある。人の師たるには、現実を処理でき

る「新しさ」を見出すことができるようになればその資格がある、と説かれている。そのためには、古いものごとを、重ねて習い、十分に熟すほど学ぶことが必要だ、というのである。

他方、西洋においてもルネッサンスという芸術、文化上の革新運動が興っている。ギリシャ・ローマの古典文化の復興を契機とし、個人の開放や自然の発見をめざした、人間中心への近代化であり、夜明けだ、と述べられている。

以上のように考えてみると、この時代に求めた「新しさ」も、孔子の教える「温故知新」の手法と重なるところがある。同じように寅彦も「科学上の骨董趣味と温故知新」という短編の中で

「新しい事はやがて古い事である。古い事はやがて新しい事である。温故知新という事は科学上にも意義ある言葉である。」、と述べている。

この背後には、漱石との出会いにより、俳諧や文学への道が開かれたこと。また科学への道は田丸先生に負うところが大きかったこと。これ以外にも、子供の頃の隣人・「重兵衛さん」の影響なども見逃せない。

寅彦にとっても新しさを見出すには、故（ふる）き「漱石、田丸先生、重兵衛さんなどの教え」を温めることによって、道が開かれたようである。

しかし、寅彦がどのような接し方で多くの人々を受け入れ、学び、「新しさ」を見出し得たのであろうか。その、詳しい心象風景は定かとは言えないようである。

人間ばかりではない、生き物や自然、ものごとへの対処法や観察方法、その配慮や思考方法、または注意集中など、その心的諸要素の考察は部分的には紹介されてはいるが、統一的全体像は判然としていない。

ところで、「新しさ」の誕生には、当然のごとく意志や感情などがはたらき、思考や行動が規定されていよう。強い意志や弱い意志、巧みな意思などが常にはたらき、寅彦の行動などを左右していたように思える。

その結果が「写生紀行」や「森の絵」等の作品を生み、漱石から教えられた、自然美と真実との発見に結びついた、と考えられないだろうか。

したがって、「新しさと創造の世界」に足を踏み入れるには、創作者の心の動きを探索する必要がある。そこで寅彦の「新しさ」を紹介するには、彼の作品から行動や言語表現などから心的経緯を考察し、その要因に迫ることも一つの方法であるように思えてならない。以下にこのことを試みたい。

2、創造について

創造について、高橋誠氏は次のように定義している。「創造とは、人が問題を、異質な情報群を組み合わせ統合して解決し、社会あるいは個人レベルで、新しい価値を生むことである。」、と述べ、当然のごとく「新しさ」と大きく重なることを示唆している。

他方、ブレ-ンスト-ミング法の考案者・フレックス・オズボーン氏は、「創造力をはたらかせるには、まず努力する習慣を身につけることから始めよう」、と提言している。それには、「才能や遺伝よりも努力できるような環境作りが第一だ」、と訴えている。

このような環境のもとで「イメージーションを正しく活かすこと」、言い換えれば「創造力を発揮させるきっかけをつくることに精進せよ」、と行動力の大切さを力説している。

このように創造には、きっかけを見出し、それを掴み取り、自分のものとして活かすよう、実践することが、諸氏の共通した意見である。

そのためには、豊かな精神力が保てるような心構えや訓練が必要であろう。体調を整え、己の感情をコントロールすること。そして睡眠や食べ物にも気配りをし、絶えず創造力を発揮できるような体力や環境作りにも配慮し、その機会を逃さないことだ、と多くの学者達が教えている。

以上のことから、「創造」と「新しさ」への探査には、当然のように心身の健康が肝要といえる。

ときにこの世界の「新しさ」と「創造」の違いをあえて上げるなら、異質な情報群の組み合わせによって生まれたものが「価値を生む」か、否かにあると言えそうである。

単なる「新しさ」には、価値が少なく、ない場合もある。他方、「新しい価値」は、発明や発見にも

通じ、我々の夢や願いとなり、理想ともなる。

そこで如何ようにしたなら、このようなチャンスに恵まれるのであろうか。以前、「自画像」、「写生紀行」、「手首の問題」などの作品で「美しさ」や「妙」の問題に触れて来た。そこには「新しさと創造の世界」が数多くあった。これらをも含め、上記の問題点を焦点化するため、さらなる考察を続けたい。

、寅彦の世界

1、随筆・「自由画稿」の中の「新しさ」

この作品には、十八の小品があり、その中に「腹が立つ元旦」という短編がある。その内容は、温厚篤実をもって知られた老人の話から始められている。まじめで親切だった老人は、毎日朝晩、神棚へ手を合わせ、快い日々を過ごしていた。それなのに、元旦になると腹が立ち、機嫌が悪くなる、という話である。

息子には、父親が何ゆえ、元旦に腹を立てているのか全く不可解だった。が、それから歳月が流れ、老人の父親も他界した年に、やはり元旦を迎えると息子も腹が立って仕方がなかった。普段なら別に気にならない、障子の破れや床の間の汚れなどというつまらない事までが不愉快の原因だったというのである。

他方、今日は元旦だから腹を立てまい、という自己抑制の心理も腹立たしさを募らせる要因の一つであることが紹介されてある。そればかりか息子の心の中で、二つの心が葛藤していたことも、腹立たしさの原因として描かれている。この時（元旦）を迎えて、息子は初めて父親の腹立たしさが理解出来た、というのである。

ところが、この息子の子供も同じように大人になり、元旦に腹を立てているのを、息子である父親が発見し、非常に驚き、恐ろしく思ったというのである。

以上が、寅彦が耳にした物語であり、やはり「温故知新」の手法に基づいて書かれた「新しさ」であることに気付く。しかしこの後に、彼特有とも言える加筆がある。

「つまらない笑い話のようで、実は深刻な人間心理の一面を暴露していると思う。こんなのも何かの

小説の種にはならないものかと思う。」、というくだりである。これは明らかに読者を意識した「新しさ」へのはたらきかけであり、「創造」への種子と考えられてならない。

つまり、我々がふだん何気なく聞き流している「つまらない笑い話」の中にも思いもよらない世界があり、物語を紡ぐ種子がたくさんこぼれている、という意図のように思えてならない。

言うなれば、我々の身边には注意深く見詰めると、そこにはたくさんの、新しさや創造的な新芽がある。そのことに私達が気付くべきだ、と寅彦は訴えている。

それには自分なりの目標を持ち、人々とのコミュニケーションの場で他人の情報に耳を傾けること。さらに読者への興味と関心を深めるため、自己体験などを織り交ぜて、内容を豊かにすることも手法の一つだ、というのである。

その実例が寅彦の体験に基づき以下のように紹介されている。

「高等学校（旧制）のある年の元旦に二三の同窓といっしょに諸先生の家へ年始回りをしていたとき、ある先生の門前まで来ると連れの一人が立ち止まって妙な顔をするとと思ったら突然仰向けにそれかえって門松に倒れかかった。そうしてそれなりに地面に寝てしまって口から泡を吹き出した。驚いて先生を呼び出し病人をかつぎ込んでから顔へ水をかけたりして大騒ぎをした。幸いにまもなく正気づいたが、とにかくこれが元旦であつたために特に大きな不祥事になってしまったのである。」、という一節である。

物語へのパリエーションをもたらししているばかりか、読者への意外性を意図したこの体験は、「新しさ」の一つとも考えられる。

次に、ふだんなら気にならないことが、どうして元旦に気になり、腹が立つのか、という疑問である。この提示も読者への想像力増進と、アイデアの種子を投じた、いわゆる創造への掛け橋を目論んだ方法と言えそうである。

同時にこのような好奇心と疑問を抱くことは、テーマや目標設定への「きっかけ」となり、さらなる問題意識の拡大や深化に繋がり、やがては大きな

社会問題まで発展し、人類愛や社会愛へと高められ、新しい価値に結びつく、と寅彦は訴えている。そればかりか、寅彦はこの問題（元日に腹が立つ）ことの謎を解くためその方策まで提示している。

それを要約すると、元旦に腹が立つのは、元日そのものが、年に一度であり、物事の初めであるからだというのである。しかもこの意識が人々の脳裏で半ば固定的な観念になっているからだ、と推論している。

人は常にものごとを始めるに当たって、「初心忘るべからず」、的な意識を持っている。この言葉には、若年の頃に学んだ芸や未熟だった初々しい、新鮮で、謙虚さに張りつめた気持ちがある。これは夢や願いをかなえてくれる、大事な源だ、と人々は信じているあまり、この気持ちを忘れまい、という強い意志がはたらく。その結果、元旦の家長や主人たちの意識にも、元日は初々しい、新鮮で美しく、静かなたたずまいでなければいけない、という固定観念が出来上がっている、というのが寅彦の考えである。もちろんこのような意識は

初晴に	はやきく風のうねりかな	吉田冬葉
初日さす戦後の畳やはらかし		桂 信子

と、いう現代の句の中にも見られる。さらに、物語の終わりで寅彦は、「腹立つ元旦」の解消策として、新しい提案まで試みている。それは、元旦という日を

「一年に一回ずつ特別な日を設けて、それを理由などをかまわずともかくにもめでたい日ときめてしまっって強いてめでたがり、そうしてそのたびに発生するいろいろな迷惑をいっそう痛切に受難することにもなかなか深い意義があるような気がしてくる。」と、というのがこの作品の一区切りである。

つまり、寅彦にとっては、他人からの話しが、疑問となり、テーマとして形成されたこと。次にその解決にのり出しことが、創作へと連なったことになる。これだけではない。新提案として読者に、「小説の種にしてみてもは？」と、はたらきかけている。

このはたらきかけ（積極性）こそが、創造への努力（オズボーン氏のいう）であろう。しかし寅彦は、上記だけでは終わっていない。元日に腹が立つ原因

をさらに探査している。

自己体験に基づき、分析と思考とを繰り返しながら、その結果を、「年に一度だから…」と、新しい解決策を例示している。さらに、元旦をめでたい日にするための、再提案まで試みている。そして結びの部分で「この日を祝いの日」、と考えた人は、一つの発明家だと、賞賛し、この作品を書き終えている。

以上のことから、寅彦は「新しさ」と「創造力」とを高めるためには、相手の言葉に耳を傾け、人間関係をスムーズにすることをまず勧めている。よりよい人間関係は、創造力を増すだけでなく、楽しい人生への糸口にもなることだ、と説いている。

しかし、寅彦のような、創造的きっかけを掴むには、それなりの目標を掲げることだ、と述べている。目標のないところに、道や方法、機会等は考えられまい。以下、目標の設定について考えてみたい。

2、目標設定と行動化

フランスの心理学者・ジャンエによれば、「心の中の流れが統一されているのが健康な姿であり、反対に心の統一が失われ、散漫しているのが病的な状態だ」、というのである。

寺院の僧侶が朝毎に祈祷し、お経を読むことも心の統一をはかり、己の目標達成を容易にするための修行だとされている。

このように私たちの人生には、それぞれにある目標があり、それに向かって生きているのが常であろう。しかしその目標が一時的で、単なる思いつきや時代の流れに左右され、感情に支配された、その場限りの欲求となっていないだろうか、それではその目標に価値があり、己の理想的な生き方に通ずるとは思えまい。

ただ一度の人生を自分らしく、個性的な目標を掲げて生きることは、自由であり、誰にでも出来る。が、上記のように生きるにはそれなりのゆとりや豊かさが必要であろう。

しかし、今は生活することはいっぱいであり、価値など吟味する余裕がない、と思い込んでいる人もいよう。

また、今は多忙なため仕方なく、一時的な非難場

所として、安易な道につい手を染め、流されているのだ、というのも私たちの現況であろう。

しかし、このようなきびしい現実にあっても意義ある、価値の高い生き方を模索し、生きている人もたくさんいる。そんな中にあっても多くの人たちは、生きることへの目標設定に頭を痛め、懸命になっているのが現状ではなかろうか。

齋藤茂吉の歌集・『あらたま』に

あかあかと一本の道とほりたり

たまきはる我が命なりけり

という歌がある。

(秋の夕日に照らされて一筋の道がはるか向こうまで走り続けている。この道こそ自分の生きて行く、命の道なのだ。)と解されている。この場合の「一本の道」とは概念的な意味ではなく、茂吉の生き方を秋の風景に託し、象徴的に表現した、というのである。

この頃、茂吉の心には複雑微妙なことがら・(母の死や外遊等)が逆巻いていた。そんな状況下にあって師・(伊藤左千夫)の没後の歌壇・「アララギ」を引継ぎ、守り発展させるという課題(目標)があった、という。それが「一本の道」だと紹介されている。

つまり、茂吉にとっては、何であるかは問題ではなく、どこへ行こうとしていることが問題だったのではなかろうか。自分の歩いてゆく、一本の道の到達点に目標があるのではなく、守りながら発展させてゆく、旅そのものの過程に目標があったように考えられてならない。

このことについて、フランスの哲学者・ルソーも『エミール』の中で「最も多く生きた人は、最も長生きをした人ではなく、生を最も多く感じた人である」 - 1、と、述べている。

「生を最も多く感じた人」とは、人生の中で虚しく、無力感に陥り、絶望的に生きる人ではあるまい。自分自身の生活のあり方を自分なりに立て、それにしがたい、主体的に行動する人であろう。茂吉の歌には、生きることへの決意が「一本の道」となり、あかあかと輝いていたのであろう。

つまり、茂吉にとっては未来に重きを置いて生きることではなく、今の生き方を重視し、行動すること

が目標なのである。このように生きる目標を設定することは、生きがいにも通じ、確かな手応えも実感出来る、と言われている。

そこで、我々が生きることへの目標設定にあったて心がけたいことの一つに、漱石や寅彦のように「美しく生きる」ことがよく取り上げられている。小林司氏によれば、「美しく生きる」ためのポイントとして、以下の三点が強調されている。

- 1、 目標は、観念的抽象的なものではなく、具体的で生き生きとした新鮮なものであること。
- 2、 趣味でも学習でも、社会活動でもいいから、無我夢中で打ち込めるような、自分の世界というものがあること。
- 3、 ゆっくりと一步一步自己実現が図れるような、心のゆとりが持てるようなものであること。 - 2

それには、世間体とか収入や社会的な地位よりも、「自分でなくてはできない仕事」や「自分が必要とされる」ことがらを選ぶ方がよい、と教えている。

つまり、自分のしたいことと、自分が必要とされることとが一致するような目標であること。また自分の可能性を伸ばし、自己実現を図れるような目標であることが、人生において理想的なのである、と紹介している。

そこで次に、具体的な目標設定について、寅彦の随筆・「なぜ泣くか」を素材として考えてみたい。

3、目標設定の具体化

まず自分がどのような人生を選ぶべきか、例えば、スポーツマンになるか、フアブルのような昆虫学者を目指すのか、それともピカソやモーツァルトのような芸術家を目指すのか、自分なりに決める。もちろん平凡なサラリーマンでもよい。または農民として、多くの人々に安心して食べられる食材供給者を目指そう、という目標も考えられよう。つまりその人自身の立場や境遇、環境等に応じた目標でよいわけである。

例えば、韓国の純愛物語・「冬のソナタ」を見た経験から、主人公たちが、初恋を成就してゆく、愛の美しさに打たれ、いつしか涙していた、という経験

があったとしよう。

それで自分も「あの人への愛を貫き、美しくいきよう。」という目標も考えられよう。また、単に生き方の問題としてではなく、「なぜ人は涙を流すのだろうか」という情動を取り上げるのも方法の一つであろう。

事実、寅彦もこの問題を取り上げ、作品制作の意図とし、テーマとしている。彼はこの問題に「なぜ泣くか」という標題を掲げ、「泣く」ことを様々な面から検討し、作品として纏め上げている。

その方法は、日ごろ、当たり前と思っている行為や考え方に対し、常に疑いを持ち、疑問の目を向けていること。さらにこれらの疑問について真剣に取り組んでいることである。その例証とも言えることが「日常身の物理的諸問題」や「歯」、「毛ざらい」など、日頃の生活を題材とした作品が数多くあることである。

言うなれば、寅彦にとっては、常識の世界は作品制作の発掘現場であり、出発点なのである。そこで私達に求められる方途とは、まず、身近な常識に対して疑いを持ち、疑問の目を投げかける工夫と訓練とにあるようだ。このことが目標設定への出発点であり、そのきっかけを掴む第一歩と言えそうである。

それには、まず茂吉のように人生の目標を考えるのもよい。それに向かって行動を起こす事も方法の一つであろう。

しかし人にはそれぞれの立場や境遇の違いがあり、このような大きな目標を決め兼ねる場合があるろう。そんな時、寅彦の手法を取り上げるのも良策と言えまいか。

寅彦の場合、漱石との出会いの中で「美しく、真実なものを求めて生きる。」という大きな目標があり、その具体的方法として、彼は科学を愛し、他方、随筆家として作品創作に励んだことは申すまでもない。その作品の一つ、「写生紀行」の中で彼は、

「ただ空で考えるだけでは題目（テーマ）はなかなか出て来ないが、何か一つつつき始めるとその途中に無数の目当てができすぎて困るくらいである。」

- 3、と紹介している。

テーマ は頭で考えるよりも、行動を起こして考えるのがよい、と言うのである。たとえば自然の美

しさを見出すには、頭であれこれ考えるよりは、田園風景をスケッチするとか、花を生け、作ってみることの方が、より効果的だというのである。

そして、よく世の人が、「興味があるからやる」ということも一理はあるが、「やるから興味ができる場合がどうも多いようである。」 - 4、

と、寅彦は体験からにじみ出た方法を紹介している。この方法は、研究や仕事の場合も同じであり、何事へも通じる、というのが彼の考え方でもある。さらにある場合には無目的でもいい、まず行動を起こすのがよい、と力説している。

つまり、テーマ設定には、書くことや、手足や体を動かすことが、効果的で大いに役立つ、というのが寅彦の考え方なのである。寅彦ばかりか、兼好も『徒然草』（百五十七段）の中で、
「筆とれば物書かれ、楽器をとれば音（ね）たてんと思ふ。盃をとれば酒を思ひ、賽（さい）をとれば攤打（だう）たん事を思ふ。心は必ず事に触れて来る。」 - 5、

と、行動化のための根本理念に触れている。我々が行動を起こそうとする場合、「心は必ず事に触れて来る。」だから、かりにもサイコロなど、悪事に通じる物に手を触れてはいけない。手にすると、「攤打（だう）たん事を思」 - 6、い、ばくち打になり、大変な結果を招くことになるからだ、というのである。

したがって、目標設定には、たとえば絵筆や楽器など、善行へ通ずるものに手を触れるのがよい。盃を持てば酒を思い、酒屋に走り出すように、筆を執れば、筆が「縁」となり、文章が書きたくなる。「縁」とは、原因をたずけて結果をもたらす意であり、俗に言う「関係」や「ゆかり」の意である。

以上、兼好や寅彦の言葉のように、まずことに触れること、行動を起こしてみる事が肝心である。ひいてはこのことで、自分でも思っても見ない意外性に出会い、新たな世界の扉がひらく場合が多いというのである。そうして「縁」の力の大きさに驚き、行動こそが「新しさ」や「創造」への道筋なのだと気付く、というのである。

このようにテーマ設定には、まず事に触れるため、行動を起こすこと。そして「縁」の力を借りて、さらなる行動を起こしてみるのが良いと言うのである。

したがって、創作などの場合にも、テーマ 設定が決まったなら、早速ペンを執ることである。そしてテーマに添い、身近な所へ思いを馳せて書くことだ、と寅彦は勧めている。その例示として、作品・「なぜ泣くか」の冒頭部を紹介すると、

「芝居を見ていると近所の座席にいる婦人たちの多数が実によく泣く。それから男も泣く。」 - 7、と書き出している。

目標設定には、このように身近なところに目を向けて、書くのもよい。もちろん大志を抱き、大きな目標を考えるのも結構である。しかし前述のようにエベレストの登頂にはそれなりの準備や心得等が必要であろう。相手を知らないで相撲を取るわけにはいくまい。

ところで、このような身近なところに視点を据え、考え、行動するにしても、それなりの準備や訓練が必要であろう。そこで、次に文章作成を例にし、テーマ設定の具体化に取りかかってみたい。

例えば、寅彦の「なぜ泣くか」に対して、「なぜ笑うか」という問題が考えられよう。考えたならすぐ書いてみる。前記のように行動に移すことは、快いものであり、可能性を大きくする。書いたならそれで終わっていけない。その目標をよりよいものにするため、再度確認と検証とが必要である。

この検証方法を寅彦は「なぜ泣くか」の中で、まず問題の因果関係を検討し、考察している。その結果、「悲しいから泣く」という答を出している。言うなれば、「泣く」という言葉を手がかりにした、「縁」の手法ともいえる。

さらにこの手法で深めると、「悲しいから」という言葉がやや曖昧で抽象的に思われた、というのである。そこでこの言葉の具体化を図るため、自分の経験を土台とし、それを手がかりに連想の糸を手繰り寄せている。

寅彦は二度も奥さんを亡くしている。その経緯も参考にしたのであろうか。この具体化として「悲しむべき事情が身近に迫ったから」 - 8、とか「もう二度と会えない肉親の臨終が刻一刻と迫っていた」

- 9、のどという原因を突き止め、「泣く」情動がもたらされたのではないか、という結果に辿りつたというのである。

そういえば、親や子供の臨終には、決まったように「泣く」場面がある。

以上の経緯から考えたのであろうか、自分の書くべき標題を「なぜ泣くか」にし、そのテーマを、「泣くことの原因や種類またはその意義について書く」と、決めたようである。

このように書き方の経緯を参考にし、自分の書くべき課題を「なぜ笑うか」という標題にしてもよい。寅彦流の方法を取り入れ、テーマを書いてみるのも方法の一つであろう。

そこで彼の流儀に従い、「泣くこと」を「笑うこと」に置き換え、その因果関係をまず考えてみる。すると、その原因が何となく見えてくる。そこには嬉しさや喜びなどの雰囲気漂っていて、その中に笑いをかもし出す、ある要素が横たわっているように思えて来る。

落語や漫才、テレビ番組のコント、喜劇などが演じられている会場には、ある緊張から弛緩に移るムードがある。

例えば、国会中に総理大臣が演説している。その折り、時ならぬくしゃみが笑いの場と化することがあろう。また、生徒達の懸命なる授業中、最前列の生徒の居眠りなども笑いをひき起こす要因となろう。

つまり、あることがらに注意集中し、緊張が崩れた時に笑が起こるのでは？と考えられよう。

それは、このような場には、決まったように安らぎや慰め、放心など、肩の荷が降りたような雰囲気が漂っていることに気付くからである。

以上のように、笑いの場を連想し、その糸を自分なりに手繰り寄せると、その因果関係や種類、または意義や価値なども何となく見えてくる。そしていつしか明るく、楽しい気分になり、アイデアが湧いて来る、というのが寅彦特有のやり方なのである。そればかりかこのような気分がテーマを具体化するのに大いに役立つ、と彼は教えている。

さらに、書けないのではないかと、という弱い意志がいつしか強い意志に変わっていき難なく描けた、という楽しい気分になれること。このことが大いなる生きがいに通じるとも言うのである。その体験例が次のように記されてある。

「調子のごくごくいい日にはいいかげんに交ぜる

絵の具の色や調子がおもしろいようにうまくはまって行く。絵の具の方ですっかり合点してよしくやってくれるのを、自分はただそこまで運んでくっつけてやっているだけの様な気がする。こんな時にはかなり無雑作に勢いよく筆をたたきつけるとおもしろいように目が生きて来たり頬の肉盛り上がったりする。絵の具と筆が勝手気ままに絵をかいて行くのを自分はあっけにと取られて見ているような気がするのである。こんな時には愉快地興奮する。庭を見ても家内の人々の顔を見ても愉快地見え、そうして不思議に腹がよくへって来る。」 - 10、と、というのが「自画像」の中で絵筆を手に行っている時の心象風景である。

ところで、このような経験は程度の差こそあれ、私たちにも多少はある。しかし寅彦の、この境地に到達するには容易ではあるまい。まずテーマの手がかりを掴むことに苦慮しているのが現実ではなかろうか、そこで次にこの問題に触れてみたい。

4、手がかりを掴むには

目標設定の具体化を図るには、前記のように普通の生活の中からその手がかりを得るような工夫が必要である。

寅彦の作品・「なぜ泣くのか」の中にはこの手がかりとなる要素が隠されている。

それは、彼が今まで行なって来た「書く」ことの中に組み込まれている、自己肯定のトレーニングである。

自己肯定とは、自分には文章が書けるという、可能性に対する肯定である。このことは、とりもなおさず自分では書けるという自信である。これは、今までに何度も考え、書いて来たという体験によって育まれたものであろう。

ある目標に向かい、一つの小さな行動を起こし、その成功が小さな自信となる。このような意識が自己肯定の源となる。さらにこの意識の蓄積が、次なるエネルギーとなり、より大きな目標への挑戦力となる。この力がいっそう大きくなることによって自己肯定が自信と化するものであろう。

正に螺旋式とも思えるような、この精神力の強化と充実とがスポーツ選手などの修行や訓練の場でよく

見受けられる。

体操の選手やバレリーナたちは何度も同じ運動を繰り返し、練習をする。失敗に失敗を繰り返しながらもチャレンジしている。しかし、このような行為の心底には重大なポイント秘められている。

それは、これらの失敗の中で得た、わずかな成功の成功例の記憶である。この記憶の蓄積が小さな自信となり、自己肯定の意識を生み、大きく育つ種子となっていることだ。

つまり、たくさんの失敗の中にある、ほんの一瞬の成功例の記憶が自信の源になっている。選手にとっての上達とは、このような経験をたくさん積み重ね、忘れないようすることであろう。そのためにはさらなる精進をし、その蓄積に努めることが成功への手がかりとなっているのではなかろうか。前進、さらに前進という、意思のエネルギーが具体的な成功への扉を開き、自信への道に通じている、と言えるまいか。

したがって小さな目標を決め、実行してみることが早道といえよう。例えば、毎朝三十分早起きし、読書するとか、部屋の整理整頓などを決め、行なってみることが肝要であろう。このようなトレーニングはあらゆる分野に求められており、基礎となり、自己肯定の基本をなしている、と言えるのである。

アテネの金メダリスト達が私たちを励まし、勇気を与えてくれたものも、上記のような意識のトレーニングの成果であり、夢を大きく育てることに通じていたからではあるまいか。

寅彦の場合も金メダリスト達と同様、書くことの達人なのである。したがって我々が学ぶことは、失敗や煩わしさ、おっくうだという気持ちを捨て、寅彦流の、とにかくテーマ探検の旅に出てみる事がよいのである。

身近なところに目を据え、探し出すことを試みるべきであろう。小さなこと、些細なことを書き連ね、数々の失敗の中にある、わずかな成功を記憶し、蓄積することから始めるのがよい。このことが手がかりの第一歩である。

よく言われているように「失敗は成功の母」 - 11、とか、「失敗は真理の成長する学校である」 - 12、という諺の奥にも、この小さな成功の記憶がい

っぱい蓄えられていることを我々は知るべきであろう。同時にこのような意識を育てるような行為に励むことである。このようなことがあらゆる「新しさ」と「創造」の源のように思えてならない。

、おわりに

寅彦の作品には、漱石などによく展覧会や映画、または観劇に出かけた記録が数多く残されている。作品・「映画雑感」()などはその一例と言える。

「なぜ泣くか」の冒頭文・「……、婦人たちの多数が実によく泣く。それから男も泣く。」と、いう前記の一文も観劇の体験から書かれたものであろう。

したがって自己肯定のトレーニングが十分にできていた寅彦にとっては、観客の、泣く姿を目にし、その情動に対して疑問を抱き、創作への意欲が駆り立てられたのは当然のなりゆきと考えられよう。

しかし私たちには、このような場面に遭遇してもテーマどころか、疑問すら抱かないのが常ではなかろうか。新しさや創造への道には、まず当たり前と思っている常識を疑い、考え直すことから始めよ、という言葉も前述のように何度も耳にしている。

それなのに私達の目や耳など、体も心もすべて無感覚になっているのだろうか。まるで魔力にかかったように眠っている。しかしそうではあるまい。

もしそうであるならその魔力を見届け、排除する方途に専念すべきであろう。

「見えているのに見えない。」とか、「聞こえているのに聞こえない。」という内容が寅彦の作品にもよく出てくる。もちろん私達の日常生活でも不注意からではない聞き違いや見落としがよくある。

『破戒』の中の丑松の場合も同様である。その場に居合わせた仲間には聞こえなくても、丑松には父の、臨終の折りの呼び声が聞こえたという。

発明家や発見家の伝記の中にもこれとよく似た現象がよく紹介されている。インスピレーションや第六感、または勘、美感などと言われる直観だという。このような問題も寅彦の作品によくある。興味あることゆえ、今後の課題としたい。

注

- ～寺田寅彦『寺田寅彦全集』(第二巻)…岩波書店
- 、 、 - 11～市古貞次、他『日本国語大辞典』…小学館
- ～福田清人『島崎藤村』、p11…清水書院
- ～吉田賢抗『論語』・新釈漢文体系(為政第二、p46)…明治書院
- ～寺田寅彦『寺田寅彦全集』(第二巻)p117…岩波書店
- ～『創造力事典』高橋誠編者 日科技連出版社
- 、 、 、 ～A・オズボーン著、豊田晃訳『創造力を生かせ』…創元社
- 、 、 、 、 、 ～寺田寅彦『寺田寅彦全集』(第十巻)p10、11、…岩波書店
- ～角川春樹『俳句歳時記』新版…角川書店
- ～恩田彰『禅と創造性』…恒性社厚生閣
- ～木俣修『近代短歌の鑑賞と批評』…明治書院
- 1～ルソー著、今野一雄訳『エミール』岩波文庫…岩波書店
- 2～小林司『『生きがい』とは何か』…日本放送出版協会
- 3、4、5、6～寺田寅彦『寺田寅彦全集』(第三巻)p76、p219…岩波書店
- 7、8、9～寺田寅彦『寺田寅彦全集』(第十巻)p82、p63、…岩波書店
- 10 寺田寅彦『寺田寅彦全集』(第二巻)p70…岩波書店
- 12～青垣康雄『ことわざ・名言選集』…永岡書店

参考文献

- 寺田寅彦～『寺田寅彦全集』(第一巻～十七巻)…岩波書店
- 岩田九郎著～『芭蕉、俳句大成』明治書院
- マイケル・マハルコ著、齋藤勇監訳
- ～『アイデアのおもちゃ箱』…ダイヤモンド社
- 海保博之著～『連想の活用術』…中央公論社
- A・オズボーン著、豊田晃訳～
- 『創造力を生かせ』…創元社
- 木原武一著～『天才の勉強術』…新潮選書
- 恩田彰『仏教の真理と創造性』…恒性社厚生閣
- 山下柚実著『五感生活術』…(株)文芸春秋

田村康二著『生体リズムの健康法』…(株)文芸春秋
田尾雅夫著『成功の技法』…中央公論社
波多野完治著『文章心理学入門』…新潮社
ヒィリップ・ゴールドバーグ著品川嘉也監修、神保
圭志訳『直観術』…工作舎
キャロル・アドリエンヌ著、住友進訳『人生の意味』
…主婦の友者
福島章著『創造の病』(天才達の肖像)…新曜社

(Received: September 30, 2004)

(Issued in internet Edition: October 31, 2004)